

山科本願寺跡発掘調査現地説明会資料

2005年 12月 10日

所在地：京都市山科区西野山階町
 調査期間：2005年 11月 11日～ 12月 16日（予定）
 調査面積：約 150㎡
 調査主体：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

遺跡の概要

山科本願寺は、蓮如上人によって文明十年（1478）に造営が開始され、天文元年（1532）に細川晴元率いる近江守護六角氏と法華宗・延暦寺の連合軍による焼き討ちを受けるまで、活動の中心地として栄えました。山科本願寺は、寺院としての機能だけでなく、防御施設として堀と土塁を3重に巡らせ、「御本寺」「内寺内」「外寺内」の3つの郭で構成された総面積約80haにもおよぶ環濠城塞都市であったと推定されています。今回の調査地は、御影堂や阿弥陀堂、寝殿などの堂舎が建ち並んでいたとされる「御本寺」の中心部に近い場所にあたります。

遺構の概要

調査では、多数の柱穴や礎石が見つかり、この場所に建物が存在していたと考えられます。北西には、石組みの溝 15や石敷き 163、池 14からなる庭園状遺構が見られます。また南西にも同じく庭園状遺構と思われる井戸 10、溝 9、集石 12があり、これらの建物に付随する庭園であったと推測されます。

調査区東側には、焼成土壌 1 や、埴とガラス製小玉が多量に入った焼土の詰まる土壌 3 があり、その他にも柱穴や土壌が存在しています。この遺構の密集度や重なりは、数度にわたる建て替えや改修が行われたことを表していると思われます。

これらの遺構の中には、山科本願寺が焼き討ちにあったことを物語る焼土層で覆われていたものもありました。この焼土層や遺構の中には、大量の土器の破片が入っていましたが、この当時日常生活に主に使用された土師器がほとんど含まれず、その大半が中国や東南アジアからの輸入陶磁器でした。この時期のこれほどまとまった輸入陶磁器の出土は他に類を見ません。なかには豆彩^{とうさい}の碗など非常に珍しいものも見られます。また、仏具の一部と思われる大小のガラス製小玉や金銅製飾り金具なども出土しています。

まとめ

これら遺物の豊富な内容や、柱穴・礎石の大きさから考えられる建物の規模から、この場にあった建物は、山科本願寺の諸施設の中でも極めて重要なものであったことをうかがわせます。

出土遺物写真



写真1 中国製（明）の磁器



写真2 東南アジア系陶器



写真3 ガラス製小玉



写真4 金銅製飾り金具

豆彩 とうさい

中国の磁器の絵付け技法の一種で、豆色（青緑色）の上絵具がとくに美しく印象的であることからこの名がある。明時代成化年間（1465～87）に完成した。

おわび

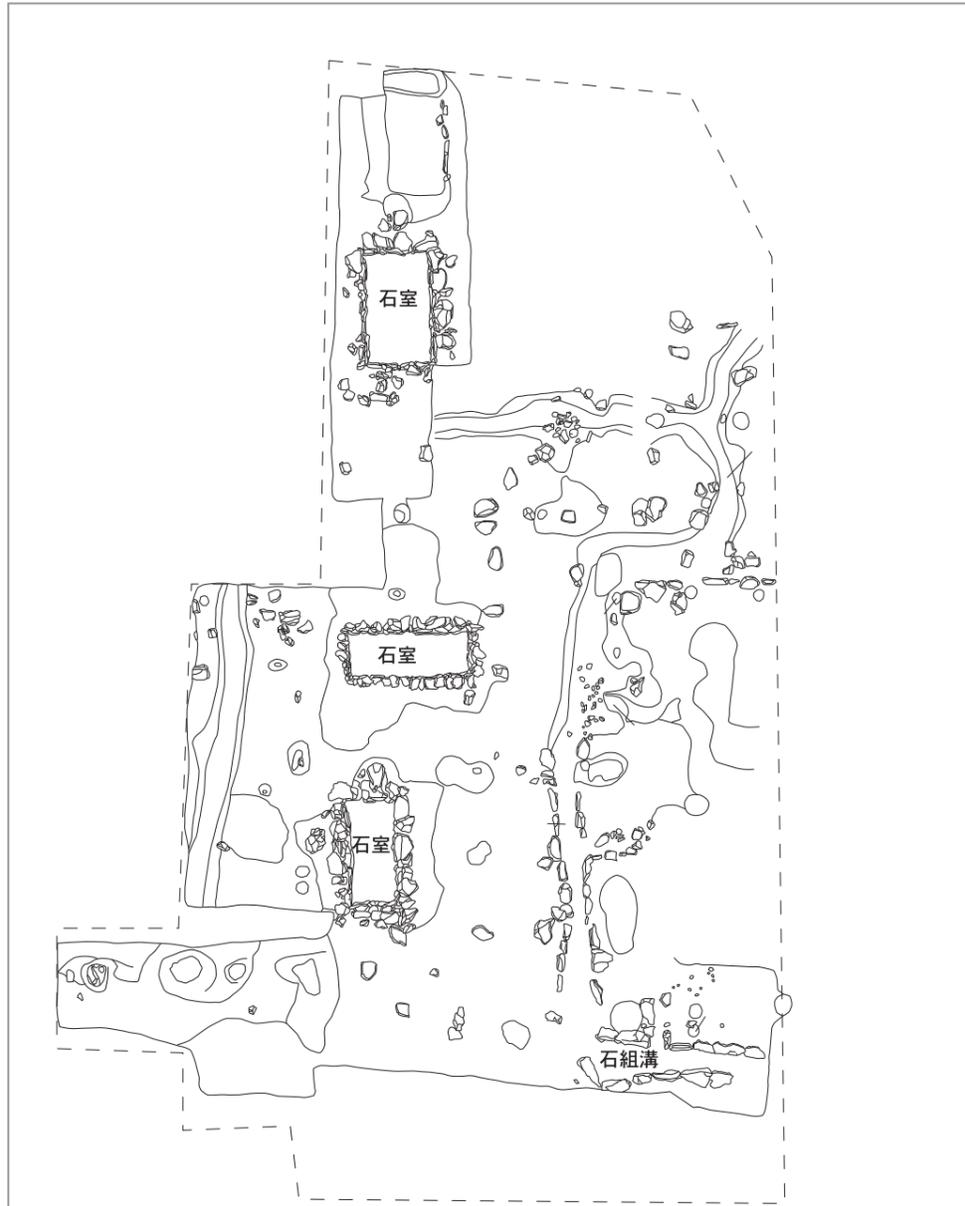
今回の出土遺物は、現地が狭いことやガラス小玉など特殊な遺物が多く展示することができませんでした。

そのため、京都市考古資料館（今出川大宮 TEL075-432-3245）で12月10日（土）から12月18日（日）まで速報展示させていただきますので、是非ご見学下さい。（ただし、12月12日月曜日は休館となります）



Y=-17,1600

Y=-17,150



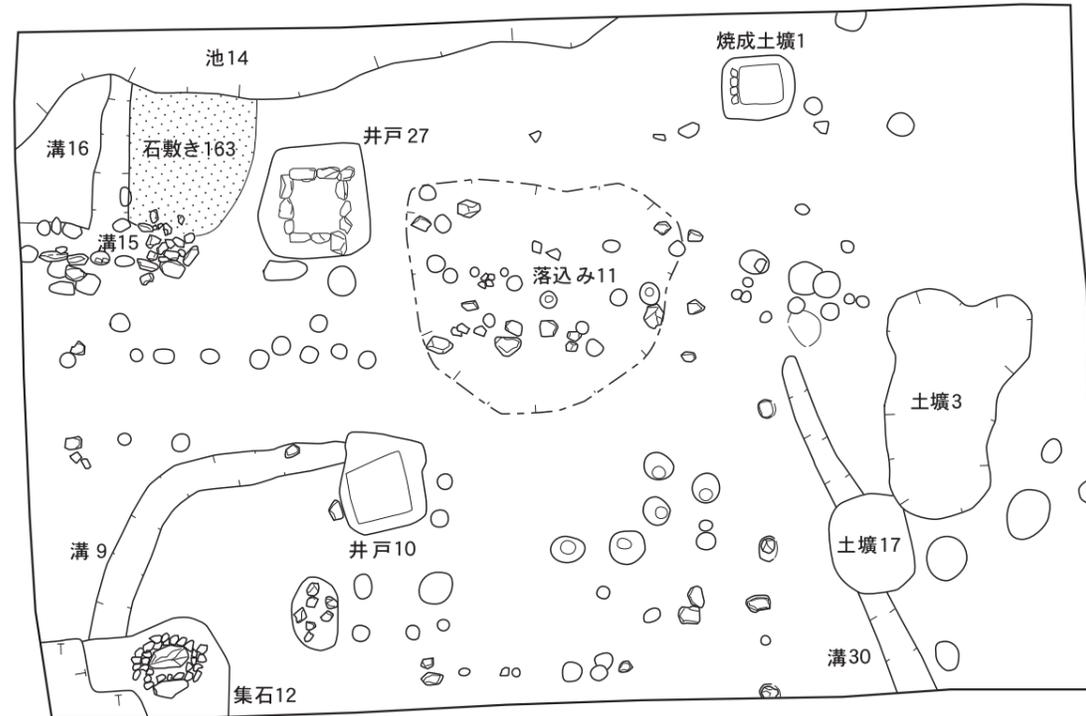
山科寺内町遺跡調査団1974年調査地

注) 報告書より、おおまかな位置に表示したもので、正確な位置ではありません。

岡田保良・浜崎一志「山科寺内町遺跡の発掘調査」『国立歴史民族博物館研究報告第8集 共同研究「中世の地方政治都市」』国立歴史民族博物館 1985の掲載図から作成したものです。

Y=-17,140

Y=-17,130



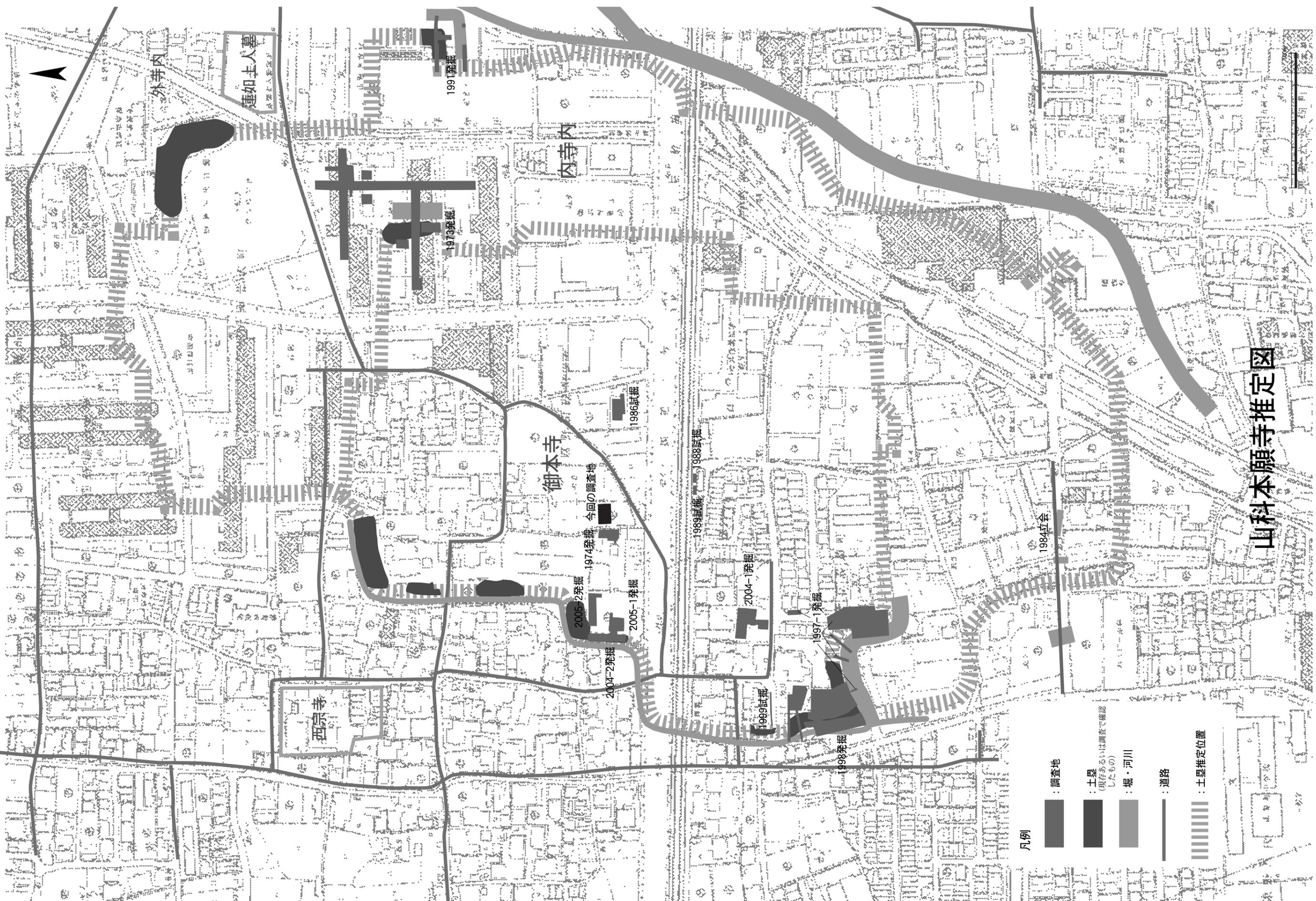
今回の調査地

X=-113,290

X=-113,300

遺構平面図





山科本願寺推定図